

夢中になって遊びこむ子どもをめざして



東庄町立こじゅりんこども園園長 関口 喜代美

1 はじめに

本園は、平成31年に5歳児の保育のこども園として開園した。園児は62名である。

園児にとっての遊びは、それ自体が目的である。時がたつのも忘れて夢中になって楽しむものであり、その中に発達に重要な体験が含まれる。保育者の環境の工夫や援助の方法により遊びを広げ深めることで、園児の様々な能力を引き出すことができる。そこで「見える化」をキーワードとして、環境の工夫や援助の方法に視点をあて取り組んだ。

2 遊びを広げ深める

園児の「おもしろそう。やってみたい。」の思いから始まった遊びには、楽しさがある。もっとやりたいと繰り返し遊ぶ中でいろいろな技能が身に付く。遊びの中で試行錯誤しながら子どもなりの思いや目当てが達成した時、充実感や達成感を味わい遊びへの高まりがみられ主体的に取り組む姿が見られる。

日々、子どもたちが夢中になって遊んでいる姿を写真に撮り掲示したり、制作したものを紹介したりすることで、子どもたちは自分の遊びを視覚的に捉えることができたのであろう。興味関心は、一層高まり、遊びの連続性や継続性も見られるようになった。

3 援助の方法を探る

園児が「やりたい」と始めた楽しさを保育者が共有し、見守りながら支えていくことで遊びが豊かになる。遊びの中で、保育者は常に「学び」や「成長」を見極めながら援助することが大切である。そこで「遊びの記録シート」を作成し、職員間で事例をもとに研修をしている。

研修の中で、保育者が遊びの中での環境の工夫と言葉掛けについて、作成したシートをもとに話し合う事で、その場の遊びを見ていない教員間での情報の共有を可能にし、保育者の指導力の向上につながっている。



4 見える化により

「環境の工夫」と「援助の方法」に視点をあて、見える化をしたことにより、園児の遊びも多様化し、個から集団へと遊びや友達関係も広がり、楽しく遊ぶ姿も見られた。個から集団になることで、様々な言葉や非言語によるコミュニケーションによって多くの発想が生まれ豊かな感性や多様な表現活動につながっている。

5 おわりに

日常あふれている遊びを継続して記録し掲示することで、園児の変容や成長をみとることができた。また、研修を通して環境の工夫や援助の方法も共有しながら、指導力の向上にもつながっている。保育者の意識が変わることで、園児の興味関心や意欲を高め、豊かな遊びにつながる。幼児期に経験する遊びは、小学校の学びの基礎である。今後も夢中になって遊びこむ園児を支える園でありたい。